第 55 回　原著論文を書きたい

ここ十数年来、東北大学在任時代に比べるとはるかに少ないとはいえ、学術論文を含めた多種多様な文書を書く機会があったが、最近淋しく思っているのは自分自身が書くべき原著論文と縁が薄くなっていることである。原著論文は決して容易に書くことができるはずはなく、しかも現状では不可能に近いといわざるをえないにもかかわらず、筆者にとってはそれが今でも大変貴重な宝のように思われることには変わりはない。いうまでもなく原著論文を著すことは研究者にとって最も大切なことのひとつなのである。

筆者がこれまで関与してきた自然科学の一分野である医学においては、著書としての学術論文はその内容や様式により、基本的には原著、症例報告、総説、短報告、手紙文などにまとめて分類される。論説（Editorial）は学術論文の範疇からは除外される。

原著論文（Original Articles, Regular Papers）は、学術論文の中で最も基本的なひとつで、ひとつの研究テーマに研究者の得た知見を文献検証によって考察し、著者独自の論理結論をまとめたものである。医学では基礎研究と臨床研究があるが、ほかの研究者によって検証に引用され利用される論文は、その著者にとって名誉なことであるとともに、引用論文の掲載学術誌の価値も上がる。学術誌の平均的な論文の被引用回数はインパクトファクターといわれている。Nature や Science などは世界中の研究者が論文掲載を望んでいる権威のある高いインパクトファクターの超一流学術誌である。最近存在の真偽が大きな問題となった STAP 細胞（刺激惹起性多能性獲得細胞）に関する論文の Nature 掲載が取消しとなったのは記憶に新しい。そのほかの学術誌に関しては、その現況の詳細については差し控えたい。

症例報告（Case Report）は、今まで同じ内容では報告されていない臨床例や、新たに開発された診断法や検査法や治療法などを適用した症例や、とくに治療法では新薬使用症例などの経過について考察を加えて報告したものである。これは特定疾患や遺伝性疾患の統計などの論理の展開のために利用される。さらに症例報告によっては難治性疾患の新しい治療法や珍しい合併症を紹介することによって臨床成績の向上につながる。

総説（Review）は、ある一定な主題の医学事項に関して文献や資料を示しながら概論的考察を加えたものである。たとえば臨床疾患を取り扱ったものでは、多種多様な文献を集積し引用してその疾患の原因、診断、治療法、予後、予防法などについて述べられている。総説ではよく最近とくに関心を持たれている疾患や診療事象がとりあげられ、その事項に関する最新の知見を全般的に知ることができる。博士論文や修士論文などの学位論文や卒業論文なども考察についての項目でしばしば総説の形式をとる。

短報（Brief Report）は、研究における新しい発見や概念を誰よりも先駆けて早く発表するために、雑誌の広報欄に速報形式で取り扱われる。原著論文の形式に従って書かれる。医学における短報は、しばしばその研究の先取権(priority)を獲得するために使われる。

手紙（Letters to the Editor）は 2 種類があり、ひとつは、当該雑誌に掲載された論文に対する関連データや反論などを載せたものである。学術誌の中にはこれは当該論文の掲載後あまり時間が経たないうちに投稿されることを必要とし、掲載後 4 週以内に制限しているものがある。もうひとつの手紙は、著者の研究の優先権（priority）を確信するための報告で、短報の形式をとるものである。

医学論文はどのような言語で書かれるものであれ、これまで述べてきたように原著、症例報告、総説、短報告、手紙文などに分けられるが、どのような文章にしても全体として起承転結がなければならない。一般的な原著や症例報告では、まず何故そのような論文を書くのか、あるいは書かなければならないのかというような意図を示す緒言ののち、得られた問題や現象などを系統的に一貫して記載したのち、筆者の分析過程の妥当性を文献などに基づいて推敲考察し、結論に至る。特に原著論文の文章は、執筆者の感情をできるだけ除いて淡々と書くことが必要である。しかしながら自分自身のかつての論文について振り返ってみると必ずしも淡々とは書かれていなかったものも多々あることも事実である。若かりし時代の筆者の恩師教授はよく、弟子が意気込んで差し出した提出論文に溢れんばかりの朱筆訂正とともに、鮮やかな筆致で「知らざる者、発見多し」「論文とは雑嚢のように何でも入れればよいというのではありません」などと書かれて戻されたものである。提出した筆者の論文の一章のすべてが削除されて戻ってきたこともあった。

医学を含む科学論文は文学作品ではないが、論文のなかに筆者自身の感情を入れることが多少許されるとすれば総説であろうか。そのテーマについて流れるようなみずみずしい論調の希望に満ちた将来展望などが書かれている総説などは記憶に残る。

静かに考えてみると、原著を書くということは、初めに希望したテーマに挑戦した成績を論理に従って考察して、テーマに迫る新しい結果に到達する過程なのである。それは並大抵のことではなく、現在の筆者にとっては不可能に近いが、晩年も医学者・科学者として過ごしたいと思うのである。

将来、医学に限らず科学分野で人生を過ごしたいと考えている若い人は、是非原著論文に挑戦してほしいと思う。